

令和元年6月18日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04366

研究課題名(和文) 青年期高機能自閉症スペクトラム障害の自己理解をめぐる葛藤への支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Research of Support Programs for Conflicts with Self-understandings of High-Functioning Autism Spectrum Disorder at Adolescence

研究代表者

木谷 秀勝 (Kiya, Hidekatsu)

山口大学・教育学部・教授

研究者番号：50225083

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：青年期高機能自閉症スペクトラム障害(HFASD)を対象とした短期集中型「自己理解」プログラムを試みた。その結果、次の4点が明らかになった。適応に大きな問題がなくても、潜在的な不安(特に社交不安)が高い。不安の高さが阻害要因として「自己理解」から「自己決定」へステップアップすることに困難さが増す。「自己決定」へのステップアップには、青年期モデルとしての仲間の存在や居場所作りが重要である。女性HFASDの場合、身体感覚への理解を進めながら女性独自のプログラム開発が重要である。したがって、「自己理解」から「自己決定」がさらに促進されるために、「効果の可視化」を進めることが今後の課題となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今回の調査研究からは、幼少時期から支援を受けて、良好な社会適応を維持している高機能ASDが、青年期以降で課題となってくる自立した生き方を安心かつ安全にサポートするためのプログラム開発として援用できる。また、現在大きな課題となっている大学における障害学生支援のためのプログラムとしても活用できる。

研究成果の概要(英文)：Authors tried at intensive "Self-understanding" program (from four times in a year one-day program to training camp of four days) for High Functioning Autism Spectrum Disorder (HFASD) at Adolescence for three years.

As a result, following four points are revealed. HFASD face high potential anxiety (especially, social anxiety) without some problems in realistic adaptation. high potential anxiety increases in difficulties that HFASD actively step up from "Self-understanding" to "Self-determination". presence of peers as social models of youth age and stable place making are important to step up to "Self-determination". in order to advancing the original programs for women's HFASD, we must understand at women's physical senses. Therefore, we examine further tasks that "visualization of effects" is important to promote more "Self-determination" through "Self-understanding" programs.

研究分野：臨床心理学

キーワード：自閉症スペクトラム障害 青年期自閉症スペクトラム障害 自己理解 自己決定 女性の自閉症スペクトラム障害

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

今回の支援プログラム開発の理論的背景として、木谷(2013)で報告したように、幼児期から青年期までの高機能 ASD の成長過程を追跡した調査結果として、「自分らしさ」を主体的に選択できるための「自己理解」が重要であることが明確になった経緯がある(木谷,2014、木谷,2016)。ところが、青年期になると、個々の高機能 ASD が求める支援ニーズが多様化するだけでなく、青年期以降の生き方のヒントとなる社会的モデルが欠如している現状が生じやすい。しかも、高機能 ASD の場合には、潜在的な不安症状(特に社交不安)が高いため、新規な環境への適応が難しいために、より安心かつ安全な居場所での仲間作りが重要な課題となっていた。

### 2. 研究の目的

そこで、3年間の調査研究では、次の3点を目的として、短期集中型「自己理解」プログラムの開発を進めた。

参加者の障害特性・地域性に柔軟に対応できるプログラム開発。

それぞれのプログラムに必要な効果測定を進め方

「自己理解」の促進を阻害する心理的要因の検討

### 3. 研究の方法

平成28年度からの3年間で、実践した「自己理解」合宿は、日間賀島での4泊5日のプログラム(木谷ら,2016) 大学内の研修施設(3日間の通所)のプログラム、下関市で3年間継続している2泊3日のプログラム(藤井ら,2017・2018、木谷ら,2019)そして、女性の高機能 ASD を対象とした「アスペガールの集い」(6時間で年間3・4回開催する)のプログラム、その合宿(1泊2日)プログラムを実施した。

#### (1) 日間賀島(4泊5日)のプログラム

この日間賀島のプログラムでは、次の4点で成果が示された。

「自己理解」の準備段階ができていくこと

参加する青年期 ASD 児者が、アスペ・エルデの会の定期的な活動に参加して、日間賀島の合宿にも複数回参加していることもあり、「自己理解」を深めるために必要な、感情理解・気分転換のスキル・集団行動上の援助スキル等の基本的なスキルが、身につけている場合が多い。

自分自身の時間感覚で変化を実感できること

実際のプログラム自体は、2日目から4日目の午前中(約3時間)で実施しているが、5日間という長い時間の中で、本人もスタッフも焦ることなく、体得したスキルの成果を実感できる機会も多くなることは確かである。

ON と OFF の切り替えが明確であること

一日の生活の流れは、午前中がそれぞれのプログラム、午後は日間賀島がもつ自然を満喫できるようにプログラムが組まれている。このように、ON と OFF を明確にすることと、その見通しを明確にすることで、参加者の気持ちだけでなく、心身の疲労度の調整を行うことが容易になることは確かである。

質量ともに豊かなスタッフ構成

参加者には1対1で担当を固定できるだけでなく、専門的知識や経験が豊富なスタッフが配置されているので、安全かつ安心してプログラムを進めることが可能である。

#### (2) 東京学芸大学(3日間の通所)の実践

平成 29 年度には、東京学芸大学の藤野博先生と研究室の協力を得て、東京学芸大学キャンパス内にある研修施設を活用して、通所型（3 日間、会場まで自分で通いながら参加する形式）のプログラムを実践した。大都市圏では、公共交通機関が充実していることもあり、また、青年期 ASD の場合には、集団で宿泊することに抵抗感が強い当事者も多いことから、このプログラムでは通所型を採用した。具体的には、青年期 ASD 者 6 名が参加して、TRPG を取り入れながら、「自己理解」プログラムを実施した。

### （3）下関での 2 泊 3 日の「自己理解」プログラム

日間賀島の実践を中核的モデルとして、継続的に参加可能なプログラム開発も目的として、平成 28 年度から 30 年度まで実施した（藤井ら，2017・2018、木谷ら，2019）。

平成 28 年度の下関合宿では、従来からのプログラムを踏襲した形式で進めた。3 日目のプレゼンの時間では、希望する保護者にも参加してもらったが、親ですら聞いたことがない当事者ならではの思いを聞くことで、家族自身が成長を再確認することができた。

平成 29 年度の下関合宿では、集団活動を中心においてプログラムとして、「仲間がいたからこそ、自分がわかる」体験を取り入れた。

平成 30 年度の下関合宿では、平成 28 年度と比較して、大幅にプログラム内容を変更した。その背景として、主に 2 つの理由からである。第 1 に、2 回目・3 回目の参加者が多数いるために、成長に合わせたプログラムの改変が必要であったこと。第 2 に、成長に伴い、就労の問題が顕在化してきたため、この就労を意識しながら、「効果の可視化」を中心にしたプログラムを進めた（図 1）。こうした「効果の可視化」の詳細な報告は、来年度以降に行う予定であるが、実際にこうしたプログラムを進めることで、視覚情報が優位な ASD には、その場での効果だけでなく、下関合宿の後で、クリニックなどで面接を行った際にも、自己評価・他者評価などの結果を覚えていることが多いことが明らかになった。

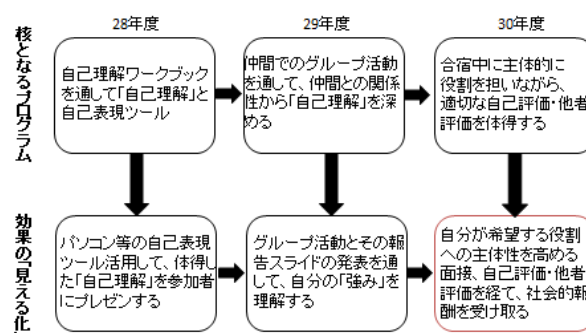


図1: 過去3年間の短期集中型「自己理解」プログラムの成果

### （4）女性の高機能 ASD を対象としたプログラム：アスペガールの集い

この「アスペガールの集い」では、「女性」だから、「ASD」だからよりも、一人の個性豊かな個人として、他の参加者と一緒に活動することをもっとも重視している。その視点を基盤としながら、第 1 に、安心できる仲間関係、第 2 に「自分らしさ」を自由に表現できるプログラム、第 3 に、笑顔で家に帰ることができるプログラムの 3 点を目的とした。その成果として、の活動の 1 年目の成果として、「『自分らしさを取り戻す』時空間の保証」が明確になった（岩男ら，2017、木谷ら，2019）。

#### (5) 女性の高機能 ASD を対象としたプログラム：アスペガールの合宿

こうした日常生活の延長上で行うプログラムと並行して、参加者の生活リズムの再確認やまだ見ていない「自分らしさ」を表現できることを目的にして、1年に1回の「アスペガールの合宿」を開催した(岩男ら, 2018、木谷ら, 2019)。特に、自由度の高いプログラム、多様性あるリラックス方法を意識すること、家族がいないから可能な自己開示、潜在的不安への保証を中心にプログラムを実施した。

### 4. 研究成果

#### (1) 3年間の短期集中型「自己理解」プログラムの成果

以上、実施したプログラム全体を通して、「自己理解」がさらに進展する経過を図2に示す。

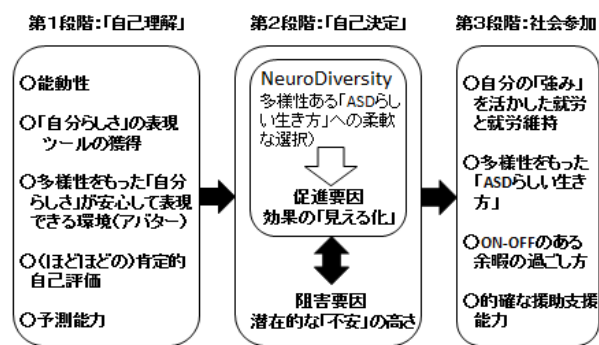


図2:「自己理解」から「自己決定」の促進過程

具体的には、「自己理解」を深めるためには、自分の特性を疲れることなく表現できるツール、自分の「強み」、その「強み」を誰にわかってもらいたいのか、そして、社会的報酬を得やすい「自分に適した役割」を、自分自身で主体的に選択しようとする「自己決定」が重要になってくる。同時に、「自己決定」に戸惑いが生じる場合に、他者への援助要請スキルを獲得することによって、「自己決定」が混乱することを予防することも可能になる。さらに、主体的に「自己決定」を繰り返しながら経験して、適切な自己評価・他者評価を経ることにより、自己肯定感が高まり、安定した社会参加に至るプロセスが仮定できる。

また、われわれのプログラムを含め、幼少時期から青年期以降の ASD を対象とした支援プログラムにおいては、長尾・川瀬(2016)は「狭い特殊な空間で行われるものではなく、生活につながっていく空間や人とのかかわりで行われるべきである」と指摘している。実際に、今回の下関合宿も、ある意味では閉鎖的な時空間でのプログラムになりがちだが、スタッフの関わり方以上に、参加者同士がお互いをモデルとしながら、同じ生活を通して「自己理解」から「自己決定」のプロセスを辿る体験を繰り返すことで、筆者らが「自己理解」において重視する「人間関係の還元すること」の成果も期待できる。

#### (2) 「自己理解」の阻害要因

その一方で、平成 29 年度において、参加者の抑うつと不安について調査を実施した。具体的には、抑うつについては、BDI- (ベック抑うつ質問票第 2 版) を事前に 1 日目に実施した。不安については、STAI(状況・特性不安検査)を 1 日目(事前)と事後(プログラム終了後の 1 か月以内に郵送で依頼)に実施した。いずれも自己記入方式を採用した。

その結果、BDI- では、平均 13.44(7.18)、境界レベル 2 名(女性 1 名)、軽度抑うつ 2 名、

中度抑うつ1名(女性)となった。このうち、境界レベルの2名は、STAIで状況・特性ともに非常に高い得点を示した。

STAIの事前調査では、状況不安の平均40.13(12.13)となり、男女ともに普通～高い段階の境界を示し、特性不安の平均49.47(10.26)となり、男女ともに高い段階を示していた。この事前調査と事後調査を比較した結果(事後調査を郵送した13名が対象)状況不安の項目で事前>事後の有意な傾向が認められた( $p<.10$ )。これらの事前・事後調査の結果からも、参加者の多くが、抑うつ気分や不安症状を併存していることが明らかになった。最近の研究でも、朝倉(2012)やKendall & Wood(2017)により、ASDに不安性障害、特に社交性不安障害の併存率が高いことが示されており、社交性不安障害に伴い、対人関係の問題だけでなく、社会参加にも大きな影響を及ぼしていることが明確になってきている。

こうしたエビデンスからわかるように、今回の調査結果で示された高い不安症状からも、短期間での「自己理解」の進展(状況不安の低下)は見られたとしても、日常生活に戻った場合に、その進展を維持することが困難になること、つまり、高い不安症状を有することが「自己理解」の阻害要因となりうるということが十分に予想される。それだけに、今回の下関合宿の参加者のように、定期的に医療・心理・教育・福祉等からのサポートを受けており、こうした専門機関との連携の上でプログラムを実施することが重要である。

## 文献

- 朝倉聡(2012): 自閉症スペクトラムと社会不安障害. 児童精神医学とその近接領域, 53(4), 96-101.
- 藤井寛子・坂本佳代子・山口真理子・牛見明日香・木谷秀勝・中並朋晶(2017): 青年期ASDへの短期集中型「自己理解」プログラムの試み. 第58回日本児童青年精神医学会総会ポスター発表.
- 藤井寛子・坂本佳代子・山口真理子・牛見明日香・木谷秀勝・中並朋晶(2018): 青年期ASDへの短期集中型「自己理解」プログラムの試み(第2報). 第58回日本児童青年精神医学会ポスター発表.
- 岩男扶美・豊丹生啓子・土橋悠加・牛見明日香・飯田潤子・木谷秀勝・中庭洋一(2017): 青年期の女性ASDへの「自己理解」プログラムの試み. 第58回日本児童青年精神医学会報告.
- 岩男扶美・豊丹生啓子・土橋悠加・牛見明日香・飯田潤子・木谷秀勝・中庭洋一(2018): 青年期の女性ASDへの「自己理解」合宿の試み. 第59回日本児童青年精神医学会総会報告.
- 川瀬正裕・長尾圭造: シンポジウム2「自閉症の療育指導」報告. 児童青年精神医学とその近接領域, 57(4), 31-55.
- Kendall PC & Wood JJ (Eds) (2017): Anxiety in Children and Adolescents with Autism Spectrum Disorder; Evidence-Based Assessment and Treatment. Academic Press.
- 木谷秀勝(2013): 子どもの発達支援と心理アセスメント - 自閉症スペクトラムの「心の世界」を理解する. 金子書房.
- 木谷秀勝(2014): 自分の障害を理解する 自己理解支援. 臨床心理学, 14(1), 61-64. 金剛出版
- 木谷秀勝・中島俊思・田中尚樹・坂本佳織・宇野千咲香・長岡里帆(2016): 青年期の自閉症スペクトラム障害を対象とした集中型「自己理解」プログラム. 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 41, 63-70.
- 木谷秀勝(2016): 青年期の高機能ASDへの支援 - 「自己理解」を中心に. 児童青年精神医学と

その近接領域 . 57 ( 4 ) , 43-47 . 川瀬正裕他 : シンポジウム 2 「 自閉症の療育指導 」 報告 . 同誌 , 31-55 .

木谷秀勝 ( 2018 ) : 発達障害のある子の自己理解 - 二次障害を防ぐ . 児童心理 , No. 1056 , 58-62 .

木谷秀勝・藤井寛子・舩越高樹・坂本佳代子・山口真理子・牛見明日香・岩永翔太・山村友梨紗 ( 2019 ) : 青年期 ASD の 「 自己理解 」 合宿の実践報告 . 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 , 47 号 , 21-28 .

木谷秀勝・岩男芙美・土橋悠加・豊丹生啓子・飯田潤子・牛見明日香・山村友梨紗 ( 2019 ) : 青年期女性 ASD の 「 自己理解 」 プログラムの実践 . 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 , 47 号 , 29-36 .

## 5 . 主な発表論文等

〔 雑誌論文 〕 ( 計 6 件 )

木谷 秀勝、岩男 芙美、土橋 悠加、豊丹生啓子、飯田 潤子、牛見明日香、山村友梨紗、青年期女性 ASD の 「 自己理解 」 プログラムの実践、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、査読無、47 号、2019、pp.29-36

木谷 秀勝、岩男 芙美、土橋 悠加、豊丹生啓子、飯田 潤子、牛見明日香、山村友梨紗、青年期女性 ASD の 「 自己理解 」 プログラムの実践、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、査読無、47 号、2019、pp.29-36

木谷 秀勝、発達障害のある子の自己理解 - 二次障害を防ぐ、児童心理、査読無、1056 号、2018、pp.58-62

木谷 秀勝、ウェクスラー式知能検査から理解できる自閉症スペクトラム障害における外傷体験の特徴 - 感覚障害・協調運動の不器用さ・不注意を中心に、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、査読無、43 号、2017、pp.57-66

木谷 秀勝、自閉症スペクトラム障害への WISC- の臨床的活用、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、査読無、43 号、2017、pp.47-56

木谷 秀勝、青年期の高機能 ASD への支援 - 「 自己理解 」 を中心に、日本児童青年精神医学とその近接領域、査読無、Vol.57、No.4、2016、pp.43-47

〔 学会発表 〕 ( 計 4 件 )

藤井 寛子、坂本佳代子、山口真理子、牛見明日香、木谷 秀勝、中並 朋晶、青年期 ASD への短期集中型 「 自己理解 」 プログラムの試み ( 第 2 報 )、第 59 回日本児童青年精神医学会総会、2018

岩男 芙美、豊丹生啓子、土橋 悠加、牛見明日香、飯田 潤子、木谷 秀勝、中庭 洋一、青年期の女性 ASD への 「 自己理解 」 合宿の試み、第 59 回日本児童青年精神医学会総会、2018

藤井 寛子、坂本佳代子、山口真理子、牛見明日香、木谷 秀勝、中並 朋晶、青年期 ASD への短期集中型 「 自己理解 」 プログラムの試み、第 58 回日本児童青年精神医学会、2017

岩男 芙美、豊丹生啓子、土橋 悠加、牛見明日香、飯田 潤子、木谷 秀勝、中庭 洋一、青年期の女性 ASD への 「 自己理解 」 プログラムの試み、第 58 回日本児童青年精神医学会、2017

〔 図書 〕 ( 計 2 件 )

木谷 秀勝 他、誠信書房、日常臨床に活かす精神分析、2017、267

木谷 秀勝 他、金子書房、発達障害のある女の子・女性の支援 - 自分らしく生きるための 「 ころこ・からだ・関係性 」 のサポート、2019、196